

## 四二球の戦い

二〇〇八年の北京オリンピック、ソフトボールは次のオリンピックでは種目から外れることが決まっている。ソフトボールにとって最後のオリンピックで、日本代表チームは強豪国との試合を勝ち抜き、見事決勝戦まで進出した。

決勝戦の相手は世界最強のチーム、アメリカである。アメリカは、これまでのオリンピックはすべて優勝、今大会も予選全勝で決勝に勝ち上がってきた。予選での総得点は五十三点、総失点はわずか一点（予選二位の日本は総得点二十三点、総失点十三点）という驚異的な強さを世界に見せつけてきた。

アメリカ戦、日本はエース上野由岐子にマウンドを託した。前日に行われた準決勝、三位決定戦と上野はすべて一人で投げ抜き、三一八球を投げていた。つかれがたまっている。爪は割れ、指の皮はめくれている。

しかし、上野はオリンピックでの優勝だけを目指して、どんなつらい練習にもたえてきた。心と体の準備もしっかりとしてきている。

これまでの血のにじむような努力、たくさんの方の思い、すべてをかかえて上野はマウンドにのぼった。

二〇〇八年八月二十一日十八時三十分、日本対アメリカ、オリンピック最後の戦いが始まった。

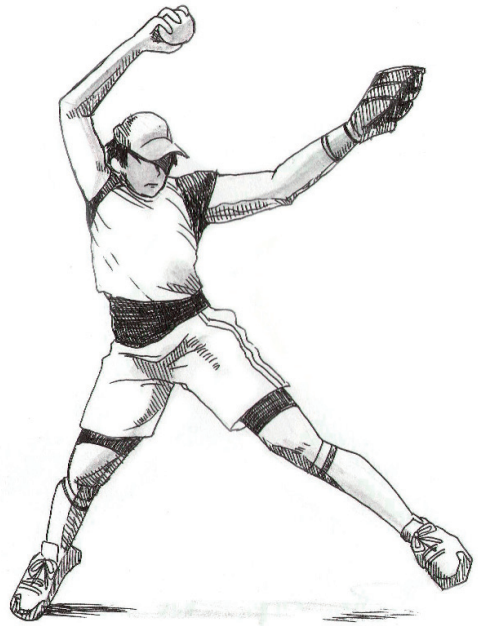
上野にはつらい思い出がある。

二〇〇四年、夢であったアテネオリンピックには出場したものの、大事な試合で先発をまかせられたのは、他の選手だった。監督の信頼を得られなかった自分をくやしく思った。

ソフトボールを続ける意味を失いかけた日々もあった。

恩師である宇津木妙子総監督、宇津木麗華監督と一緒にオリンピックで金メダルをとることはできなかった。

しかし、どんな逆境にも負けず、上野はまっすぐに歩んできた。



そして迎えた二度目の、最後のオリンピック、小さいころからの夢の舞台である。上野は全力で考え、全力で投げ続けた。日本は一回にいきなり満塁のピンチをむかえるものの、上野の冷静なピッチングで切り抜ける。

ついに三回、日本に待望の先取点が入る。四回にも追加点を入れて二対〇。しかし、四回の裏、アメリカの主砲、ブストスにソロホームランを浴び、点差は一点に縮まってしまう。

野は得意の速球ではなく、変化球をうまく使い、打たせて取るピッチングに専念する。ボールを投げるたびに激痛が走る。上野は、相手バッターのこと、自分の体の感覚のこと、あらゆることを考え、一球一球を投げ込んだ。

アメリカの打線が上野を打ち崩せないまま、ついに最終回、七回を迎えた。日本は執念でもう一点をもぎとり、三対一とする。最後のアメリカの攻撃、上野が投げ、打ちとる。激しい打球も仲間がファイン・プレイでおさえこんだ。

上野の一〇五球目、二日間を通じては四一三球目が投じられる。内

野ゴロにおさえ、ゲーム・セット！

日本の優勝が決まり、試合会場が、日本中が大きな歓声につつまれた。

上野は仲間に肩車をされ、歓喜の中央にいた。

表彰式、人前では泣かないと決めていた上野が、涙を流していた。周りの仲間も同じだった。

上野は今もボールを投げ続けている。子どもに夢をもつことのすばらしさ、努力を続けることの大切さなど、上野自身が大事にしていることを伝えるために。

(野村 宏行 作)



# 413 球の戦い—上野由岐子—

(高学年 1-(2))

## (1) ねらい

困難を前にしても、強い気持をもってやりとげる心情をはぐくむ。

## (2) 資料の特質

スポーツ選手の生き方から学ぶことで、興味をもって学習できる。また、物語の山場を発問場面と重ねることで、多様な考えがでることが期待できる。授業では、上野選手への共感を自己のふりかえりにつなげていけるようにしたい。「自分だったらどう考えるか。」「自分と比べてどうか。」のように、自分と照らし合わせて考えることで、より深く自己を見つめられることだろう。

## (3) 展開例

- 1 自分の夢や目標を発表し合う。
- 2 資料「413 球の戦い—上野由岐子—」を読んで話し合う。
  - ①きびしい試合の中で、413 球を投げ抜いた上野選手を支えたものは、何だったのか。
    - ・自分の夢をかなえようとする強い気持ち。
    - ・努力を続けてきた、自分を信じる気持ち。
  - ②上野選手の生き方から、どんなことを学んだか。
    - ・つらいことにも、逃げない姿勢が大切だ。
    - ・仲間を信じて、自分の力を出し切ることだ。
- 3 上野選手に照らし合わせて、困難を乗り越える力の出所について、話し合う。
- 4 上野選手の実際の活躍を視聴する。

## (4) 指導上の留意点及び工夫

実際の上野選手のプレイを視聴する等、視聴覚教材を活用していくことで、さらに児童は興味関心をもって考えていけることだろう。資料提示としては、スポーツ雑誌などの写真を大きくカラーコピーして提示したり、決勝の様子をVTRで視聴したりするなど、実際に見ることを大切にしたい。それにより興味関心の高さや共感のしやすさが大きく変わってくるのだ。また、ソフトボールや野球に興味の少ない子への配慮も必要になってくる。

〔本文イラストは酒井桃華による〕